女子サッカー選手のアスリート
アイデンティティ育成のために

明治大学経営学部公共経営学科
学籍番号：1740210224
4 年 9 組 8 番　川畑奏葉

目次

目次.....2
はじめに.....3
第一章　女子サッカーの歴史の変遷.....4
1-1 女子サッカーの歴史と現状.....4
1-2 女子サッカーにおけるジェンダーの役割.....6
第二章　フェミニズムから見た女子サッカーにおいての課題.....7
2-1 給与の差と改善.....7
2-2 社会的影響をもたらすメディア戦略.....11
2-3 役職やコーチの男女比率.....13
第三章　ジェンダー平等のための取り組みと課題.....14
3-1 国際的および国内の政策・支援の現状.....14
3-2 女子サッカーを通じたジェンダー平等意識の促進.....17
第四章　フェミニズム視点での考察と女子サッカーの多様性.....18
〈参考文献〉.....22

はじめに

ジェンダー構造とは、社会における「男性らしさ」「女性らしさ」に対する役割を定め、個人や集団がその枠組みに従って行動するように促す社会的な枠組みのことである。

女子サッカー界におけるジェンダー構造は、伝統的に「男性的」とみなされるスポーツ環境の中で、女性がどのように自らのジェンダーアイデンティティを適応・表現するかであると考える。Sandra Bem のジェンダー・スキーマ理論によれば、文化は、男性性と女性性の役割や期待を形成し、これが自己概念や行動のガイドとなるという[1]。女子サッカーでは、この「男性的な」構造の中で、アンドロジニティ[2]や男性性が選手に多く見られる傾向が確認されている。選手たちは高い競技レベルや激しい競争の中で、男性性を受け入れ、それを自己アイデンティティの一部として取り入れることが、パフォーマンスの向上や社会的な適応に役立つ可能性があるため、女子サッカーは「男性のスポーツ」としての側面を持つのだ。女子サッカー界におけるジェンダー構造は、選手が社会的・文化的な「男性的」価値に適応し、自身のジェンダーアイデンティティをアンドロジナス的または男性的に表現することが、自らの競技生活を支える重要な枠組みとなっていると考える。よって女子サッカーが「男性のスポーツ」としての側面を持つことは、競技レベルの向上のためにも必要不可欠であることがわかる。

しかし、サッカーに女性が参入する際に「女性らしくない」と見られ、障壁が生まれることにも伝統的に「男性的」とみなされる社会が作り出すジェンダー構造や固定観念が影響している。それゆえ、女子サッカー選手に対する支援は、アスリートに、ではなく、頑張っている女性たちへの応援であることを強調する。ただ、このような差があろうと、女子サッカーの競技環境が以前の状況と比較して改善されたため、選手たちは、それを「サッカーをプレーすることができて、ありがたい」と思うように誘導されており、ジェンダー格差に問題を感じることが困難な状況の中にいるのではないか。(2022 申恩) サッカーへの機会は女性にも開かれたものの、男性と対等な関係となるには程遠く、機会の平等と実質的な平等の間に大きな懸隔がある。

本論では、「男性性」の強いサッカーという競技において、女子サッカーの是正すべき格差を論じ、今後女子サッカーが社会においてどのようなアイコンとなり地位を確立すべきなのか、そしてそれが自己をアスリートとして強く認識し、その役割や競技への取り組みが自己の中心を占める、「アスリートアイデンティティ」の育成に繋がるのか論じたい。

---

[1] WOJCIECH WILIŃSKI　GENDER IDENTITY IN FEMALE FOOTBALL PLAYERS Gender identity in female.pdf　2024.10.31 アクセス

[2] 男女両方の特性を持つ性自認

第一章 女子サッカーの歴史の変遷

1-1 女子サッカーの歴史と現状

女子サッカーはイングランドで急速に成長し、多くの観客を魅了しているが、その背後には複雑な歴史がある。1921年、イングランドサッカー協会（FA）は女子サッカーを禁止し、その措置は 50年間続いた。この決定により、女子サッカーの発展は大きく妨げられた。

1914年、第一次世界大戦中、イングランドでは男性が戦地へ赴くと、代わり女性が工場労働を担うことになった。すると、昼休みなどを利用して女性たちはサッカーを楽しみ、夢中になった。戦争中は「組織化されたスポーツ活動は工場労働の士気を高め、生産性の向上にもつながる」と考えられたため、女子サッカーが推奨されたことも後押しとなった。

写真 1　1921 年当時のディック・カー・レディース

出典：KEGENPRESS　女子サッカーの歴史となでしこ ― イギリスから世界に普及（1／2）

https://kegenpress.com/women-football-history1/

こうした背景もあり、イングランド各地の軍需工場に女子サッカークラブが誕生していく。活動が本格的になると、クラブ間で交流試合も行われ、盛んになると、次第に観客も増えていった。人気の高まりは、戦争により男子のリーグ戦が中断されたこともきっかけになったようだった。特に「ディック・カー・レディース」チームは大成功を収め、観客数が男性の試合を上回ることもあった。彼女たちの試合は慈善事業のために行われ、その収

益は負傷兵の治療費などに寄付されるなど、大きな社会的影響を与えた[3]。

しかし、1918 年に第一次世界大戦が終結し、男子のリーグ戦が再開された後も、その熱が冷めない状況を危惧した FA は、女性の成功に対する社会的な反発や偏見も強まり、ついに 1921 年、FA は「サッカーは女性には適さない」と公式に声明を出し、女子チームが FA の管理するスタジアムで試合を行うことを禁止した。(2022 Suzanne) この決定の理由として、「健康への悪影響」が挙げられたが、実際には女子サッカーの人気が男性のサッカーへの脅威と見なされたことが背景にあった。禁止により、女子サッカーは公式なピッチや設備を使用できなくなり、リーグやチーム運営が大きく制限された。FA の「禁止令」によって、多くの女子クラブが解散を余儀なくされ、観客数はしだいに減っていった。

だが、女子サッカー自体の活動が停止したわけではない。女性たちは諦めなかった。困難な状況の中でも、地元の公園や、ときにはドッグレース場などを利用して活動を続けるクラブがあった。ラグビー場を借りて大会が開催されるなど、FA 非公式ながら交流試合も行われた。前述のディック・カー・レディースは、地元プレストンにあるアシュトンパークを拠点に活動を続け、フランスやアメリカなどで遠征試合も行っている。

1971 年、FA はようやく禁止を解除した。これは、国際的なスポーツの平等化の流れや、女性の権利向上を求める社会的な運動の影響を受けたものであった。その後、女子サッカーは徐々に再興し、国際的な大会や国内リーグが発展してきた[4]。

---

[3] KEGENPRESS　女子サッカーの歴史となでしこ ― イギリスから世界に普及（1／2）
https://kegenpress.com/women-football-history1/　（2024.12.3 アクセス）

[4] ITV News 「Why women's football was banned for 50 years」
https://www.itv.com/news/2022-08-01/how-womens-football-was-banned-for-50-years-in-england（2024.12.3 アクセス）

写真 2　1974 年にウィンブルドン・フットボール・クラブでフランスと対戦するイングランド女子サッカーチームのラインナップ。

出典：ITV News 「Why women's football was banned for 50 years」より

https://www.itv.com/news/2022-08-01/how-womens-football-was-banned-for-50-years-in- england

現在では、女子サッカーは多くの国で注目を集め、プロリーグや FIFA 女子ワールドカップが開催されている。しかし、賃金格差や待遇の違いなど、依然として男女間の不平等が残っている。この歴史は、スポーツにおけるジェンダー平等の重要性を示していると考える。イングランドで女子サッカーが 50 年間禁止されていたことは、スポーツにおけるジェンダー構造が選手や競技そのものにどれほど大きな影響を与えるかを物語っている。

1-2　女子サッカーにおけるジェンダーの役割

女子サッカーに期待されているジェンダーの役割は、単に競技の発展に貢献するだけでなく、スポーツを通じてジェンダー平等や社会的な意識改革を推進する象徴的な存在としての役割が求められていると考える。

後述するアメリカでの同一労働同一賃金の推進や、平等な競技環境の構築男子サッカーと同等の施設、資金、メディアの注目を得ることで、スポーツにおけるジェンダー平等の実現が目指されている。

その他にも、女性のリーダーシップとロールモデルとしての役割も求められている。女子サッカー選手は、女性がリーダーシップを発揮する姿を示すことで、次世代の女性や少女たちに希望を与える役割を果たす。また、サッカーを通じて、女性が自分の能力を信じ、自立したキャリアを築く姿を見せることは、若い世代にとってロールモデルとなる。そのため、女子サッカー選手がメディアやイベントで発言し、ジェンダー平等や女性の権利について意見を表明することは、スポーツを超えた影響を社会に与えることが重要である。

また、女性アスリートの地位向上の象徴となることも求めたい。女性がスポーツを職業として追求できる環境を多くの国で整え、プロフェッショナルなキャリアの確立を示すことも必要だ。加えて、スポーツにおける多様な役割の推進選手としてだけでなく、コーチや審判、管理職としての女性の活躍も求められる。女子サッカーに期待されるジェンダーの役割は、単にスポーツの中で活躍するだけでなく、社会的な不平等を是正し、多様性と平等を広める象徴的な存在としての役割を果たすことである。競技を通じた影響力が、社会全体のジェンダー規範を変革するきっかけになることが期待されている。

第二章 フェミニズムから見た女子サッカーにおいての課題

2-1 給与の差と改善

図 1 の通り、2023 年、FIFA 女子ワールドカップに出場した選手の収入ランキングでは、トップ 10 のうち 9 枠をアメリカ女子代表選手が占めた。

表 1　2023 年 FIFA 女子ワールドカップに出場した選手の収入ランキング

1	アレックス・モーガン（米）	710 万ドル（約 10 億円）
2	メーガン・ラピノー（米）	700 万ドル（約 9 億 9000 万円）
3	アレクシア・プテラス（西）	400 万ドル（約 5 億 7000 万）
4	トリニティ・ロッドマン（米）	230 万ドル（約 3 億 3000 万円）
5	クリスタル・ダン（米）	200 万ドル（約 2 億 8000 万円）
	ジュリー・アーツ（米）	同上
	ソフィー・スミス（米）	同上
8	リンジー・ホラン（米）	150 万ドル（約 2 億 1000 万円）
9	ローズ・ラベル（米）	140 万ドル（約 2 億円）
１０	ソフィア・ウエルタ（米）	130 万ドル（約 1 億 8000 万円）

出典：REAL SPORTS　なぜ女子サッカー長者番付はアメリカ代表の独壇場なのか？　米スポーツビジネスのメカニズムに見る 2 つの理由
https://www.excite.co.jp/news/article/RealSports_814323436431081472/

アメリカ代表選手はアメリカサッカー連盟との契約金や、代表をサポートするナイキなどの大手スポンサーとの契約により大きな額が入る仕組みがあり、それは 10 年以上前から続いているのだという[5]。さらに、2022 年、サッカーのアメリカ女子代表チームが同一賃金を求める長年の争いに勝利した。これにより、女子代表選手の「基本給」は廃止し、男女の報酬支払い方法を統一された。例えば親善試合の場合、対戦相手の世界ランクと試合結果に基

[5] REAL SPORTS　なぜ女子サッカー長者番付はアメリカ代表の独壇場なのか？　米スポーツビジネスのメカニズムに見る 2 つの理由（2024.12.19 アクセス）
https://www.excite.co.jp/news/article/RealSports_814323436431081472/

づき、男女同額の報酬やボーナスを支払う。世界ランク 25 位以内または近隣ライバル国(女子：カナダ、男子：メキシコ)と対戦する場合、男女とも出場登録給(Appearance fee)の 8,000 ドルに加えて、ボーナス(勝利 1 万ドル、引き分け 3,000 ドル)を支給する、等だ。

また、近年はヨーロッパ勢が勢力図を拡大しており、前回のワールドカップではベスト 8 のうち 7 チームを占めた。各国でリーグのプロ化が進んでいて、強豪国の選手たちの収入も数年前と比べて上昇傾向にある。国内トップリーグの平均年俸は、イングランドが 4 万 7000 ポンド（約 850 万円)、アメリカが 5 万 3000 ドル（約 750 万円)、フランスが 4 万 8000 ユーロ（約 750 万円)、ドイツが 4 万ユーロ（約 600 万円）ほどである。一方で WE リーグはプロ契約の最低年俸は 270 万円、最高では 1000 万円ぐらいの選手もいるが、平均値は 300～400 万円ほどだという。

そこで、日本で女子サッカー選手という職業がもっと夢のある職業になるためにも、資金調達方法について述べていく必要がある。WE リーグクラブは、J リーグと異なり経営情報の開示は行っていないため、J リーグが公開した 2023 年度経営情報の女子チームを持つ J クラブの、女子チーム関連収入と、女子チーム関連経費の項目に着目した。

表 2　2023 年度 J 1 クラブ 決算

1．損益計算書

（百万円）

		札幌	鹿島	浦和	柏	ＦＣ東京	川崎Ｆ	横浜ＦＭ	横浜ＦＣ	湘南	新潟	名古屋	京都	Ｇ大阪	Ｃ大阪	神戸	広島	福岡	鳥栖	Ｊ１総合計	Ｊ１平均
		2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年3月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年3月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期		
損益計算書	売上高	4,111	6,462	10,384	4,419	5,929	7,963	6,609	3,627	2,812	3,659	6,303	3,393	6,674	4,898	7,037	4,198	2,874	2,497	93,619	5,201
	スポンサー収入	1,933	2,418	4,223	3,111	2,896	3,462	2,222	1,929	1,287	1,239	2,736	1,997	2,198	2,741	2,409	1,864	999	982	40,098	2,228
	入場料収入	776	1,201	2,146	413	1,206	1,268	1,496	524	523	847	1,242	599	970	900	1,320	631	618	619	17,293	961
	Ｊリーグ配分金	347	333	473	295	316	432	410	287	276	322	352	299	321	269	536	318	310	309	6,197	344
	アカデミー関連収入	26	269	32	22	436	263	0	240	62	196	217	135	213	0	256	103	151	62	2,672	149
	女子チーム関連収入	0	0	121	0	0	0	0	0	25	0	0	0	0	182	0	311	0	0	639	36
	物販収入	467	893	1,593	11	610	861	1,244	235	99	630	634	123	677	225	831	411	265	229	10,012	556
	その他収入	563	1,359	1,807	567	524	1,607	1,134	813	543	431	1,119	250	2,305	540	1,685	563	594	305	16,708	928
	売上原価	3,996	4,700	7,403	3,091	4,476	5,356	4,909	3,239	2,174	2,129	5,324	2,633	4,649	3,215	6,421	4,128	2,521	2,021	72,464	4,026
	トップチーム人件費	1,723	2,532	3,890	2,664	2,597	3,287	3,042	2,069	1,256	889	2,838	1,538	2,763	2,010	3,800	2,435	1,011	1,019	42,237	2,347
	試合関連経費（ホームゲーム開催費）	617	368	726	115	309	269	491	264	195	268	432	221	429	412	514	901	145	127	6,139	341
	トップチーム運営経費	441	378	796	178	438	661	591	268	171	232	368	228	410	544	385	398	225	206	6,922	385
	アカデミー関連経費	215	446	216	145	571	361	0	369	221	291	377	294	395	0	434	284	193	209	4,997	278
	女子チーム関連経費	0	0	404	0	0	0	0	0	51	0	0	0	0	158	0	312	0	0	923	51
	物販関連費	364	693	1,214	1	492	798	795	202	97	449	390	54	477	93	386	310	185	135	7,135	396
	その他売上原価	736	363	197	0	8	0	0	32	194	0	921	0	185	0	902	88	162	229	4,117	229
	販売費および一般管理費	644	1,997	2,614	808	1,551	2,463	1,668	734	612	810	791	678	1,386	1,242	1,842	806	445	329	21,538	1,197
	営業利益（▲損失）	▲ 629	▲ 315	367	522	▲ 97	124	▲ 68	▲ 346	26	620	188	82	539	411	▲ 1,226	▲ 736	▲ 92	147	▲ 383	▲ 21
	営業外収益	76	2	34	18	31	27	90	42	9	55	66	33	295	60	81	28	6	79	1,031	57
	営業外費用	18	13	9	47	7	2	14	29	3	9	33	53	570	68	203	41	3	68	1,191	66
	経常利益（▲損失）	▲ 470	▲ 326	392	491	▲ 73	149	8	▲ 333	31	666	221	62	264	403	▲ 1,348	▲ 749	▲ 89	158	▲ 543	▲ 30
	特別利益	90	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,400	0	0	0	1,490	83
	特別損失	30	0	0	0	149	0	5	0	1	0	0	1	0	0	3	6	0	0	195	11
	税引前当期利益（▲損失）	▲ 410	▲ 326	392	491	▲ 222	149	3	▲ 333	30	666	221	61	264	403	49	▲ 755	▲ 89	158	752	42
	法人税および住民税等	2	▲ 15	87	1	7	91	▲ 1	11	6	206	23	31	0	2	18	2	1	31	503	28
	当期純利益（▲損失）	▲ 412	▲ 311	305	490	▲ 229	58	4	▲ 344	24	460	198	30	264	401	31	▲ 757	▲ 90	127	249	14
関連する法人（アカデミーなどサッカー及びその他関連する事業を運営する法人）の営業収益		191	94	270	–	–	–	984	157	437	268	–	–	–	1,478	0	–	–	–		

2．貸借対照表

（百万円）

		札幌	鹿島	浦和	柏	ＦＣ東京	川崎Ｆ	横浜ＦＭ	横浜ＦＣ	湘南	新潟	名古屋	京都	Ｇ大阪	Ｃ大阪	神戸	広島	福岡	鳥栖
		2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年3月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年3月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期
資産	流動資産	1,413	3,062	1,406	172	3,136	1,870	1,504	817	1,287	2,341	1,388	1,059	1,147	1,890	1,580	2,063	459	1,020
	固定資産等	478	1,881	2,046	1,778	18	4,232	896	459	96	882	596	255	1,453	342	1,709	1,226	320	149
	資産の部　合計	1,891	4,943	3,451	1,950	3,213	5,902	2,403	1,276	1,383	3,223	1,954	1,313	2,600	2,232	3,289	3,889	779	1,169
負債	流動負債	835	3,180	1,663	1,718	969	3,021	2,090	537	1,095	1,878	1,145	659	1,834	1,461	1,706	1,818	1,010	729
	固定負債	1,052	198	178	0	44	130	226	911	135	821	184	27	50	328	144	638	168	598
	負債の部　合計	1,887	3,378	1,841	1,718	1,003	3,151	2,316	1,448	1,230	1,697	1,329	677	1,884	1,777	1,849	2,456	1,178	1,327
資本	資本金	1,736	2,267	273	100	1,762	349	99	100	709	100	106	59	10	100	88	2,098	383	394
	資本剰余金等	826	835	113	932	576	31	6	325	339	612	0	558	0	1,585	561	52	455	229
	利益剰余金	▲ 2,558	▲ 1,527	1,224	▲ 800	▲ 127	2,271	▲ 18	▲ 597	▲ 895	614	520	30	706	▲ 1,230	761	▲ 818	▲ 1,237	▲ 778
	資本（純資産）の部　合計	4	1,565	1,610	232	2,210	2,651	87	▲ 172	153	1,326	625	638	716	455	1,420	1,333	▲ 399	▲ 158

※1 複数会場の影響で会計値が一部一致しないところがある。会計数値は、各クラブの百万円単位の金額を単純に合計したものである。
※2 上記数値はクラブ運営法人単体の数値であるため、アカデミー（育成・普及）事業を、クラブ運営法人と直接関係のあるＮＰＯ法人や一般社団法人に移管している場合には、アカデミー関連収入及び費用が上記数値に含まれないことがある。
※3 「物販収入」および「物販関連費」は、代理店に委託販売しているケース等もあることから、取扱い高対総でのクラブ間比較はできない。
※4 固定資産等の区分には、繰延資産も含めて表示している。

出典：J リーグ公式サイト　2023 年度クラブ決算一覧

https://aboutj.jleague.jp/corporate/assets/pdf/club_info/j_kessan-2023.pdf　（2024.12.21 アクセス）

表 3　2023 年度 J2 クラブ決算

1．損益計算書

（百万円）

		仙台	秋田	山形	いわき	水戸	栃木	群馬	大宮	千葉	東京Ｖ	町田	甲府	金沢	清水	磐田	藤枝	岡山	山口	徳島	長崎	熊本	大分	Ｊ２総合計	Ｊ２平均
		2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期		
損益計算書	売上高	2,520	904	2,800	1,077	1,104	1,088	790	2,788	2,649	2,818	3,409	2,040	871	5,101	4,254	805	1,937	1,998	2,092	2,111	1,228	1,881	45,045	2,048
	スポンサー収入	1,792	487	940	499	674	680	800	1,469	1,622	949	2,956	951	390	2,919	2,575	414	891	611	1,347	1,240	459	788	23,981	1,078
	入場料収入	375	49	279	90	109	164	118	270	303	990	202	398	90	805	530	192	248	135	170	182	165	334	6,419	244
	Ｊリーグ配分金	173	199	199	132	104	118	108	112	102	128	110	216	108	248	223	104	117	108	180	118	103	186	2,988	135
	アカデミー関連収入	71	89	0	11	23	88	0	200	198	214	48	21	72	350	150	20	0	40	81	84	0	46	1,790	77
	女子チーム関連収入	0	0	0	0	0	0	0	818	127	948	0	0	0	0	0	3	0	4	0	0	0	0	790	36
	物販収入	19	51	209	119	86	120	62	167	176	109	149	322	94	229	413	90	181	101	107	202	67	224	3,910	161
	その他収入	190	161	972	240	189	47	194	249	167	1,268	244	292	167	540	263	102	580	108	227	310	424	353	7,199	327
	売上原価	1,980	661	2,096	851	810	889	690	1,781	2,089	1,998	2,605	1,563	721	3,941	2,984	493	1,409	822	1,815	2,736	751	1,408	34,590	1,571
	トップチーム人件費	1,044	295	839	282	344	816	380	762	878	778	1,904	749	399	2,269	1,413	295	715	409	884	1,789	328	801	17,739	806
	試合関連経費（ホームゲーム開催費）	239	59	190	57	127	109	87	149	173	211	312	212	91	299	402	59	154	100	96	229	170	80	3,596	163
	トップチーム運営経費	274	120	232	119	118	120	107	149	368	382	272	270	132	793	346	104	125	124	283	281	110	176	4,799	218
	アカデミー関連経費	247	118	0	49	90	117	81	328	274	220	149	101	99	522	396	28	9	122	185	248	78	149	3,544	161
	女子チーム関連経費	0	0	0	0	0	0	0	223	232	262	0	0	0	0	0	9	9	12	0	0	0	11	739	34
	物販関連費	4	39	181	51	79	88	63	104	161	143	194	221	91	36	306	33	138	58	97	171	70	118	2,229	101
	その他売上原価	172	43	893	0	69	149	12	39	183	19	15	11	10	82	2	0	363	0	0	0	0	141	1,045	88
	販売費および一般管理費	464	271	380	628	289	289	201	676	889	830	748	479	251	1,099	879	203	518	283	474	838	342	327	11,063	503
	営業利益（▲損失）	86	▲ 18	85	▲ 2	5	▲ 44	▲ 41	152	▲ 29	17	6	1	▲ 101	61	529	109	▲ 72	13	3	▲ 1,465	135	48	▲ 578	▲ 26
	営業外収益	22	1	17	53	1	3	17	8	32	6	4	18	6	19	29	7	17	1	12	1	4	2	276	13
	営業外費用	16	2	2	0	1	0	0	10	36	17	3	6	2	5	11	1	4	10	0	4	1	1	131	6
	経常利益（▲損失）	92	▲ 19	70	49	5	▲ 41	▲ 24	131	▲ 31	6	7	13	▲ 97	75	535	115	▲ 59	4	15	▲ 1,466	138	49	▲ 433	▲ 20
	特別利益	12	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1,470	0	0	1,494	67
	特別損失	12	5	0	0	0	0	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40	2
	税引前当期利益（▲損失）	92	▲ 24	70	49	6	▲ 41	▲ 24	131	▲ 54	6	7	13	▲ 97	76	535	115	▲ 59	4	15	4	138	49	1,011	48
	法人税および住民税等	12	▲ 1	31	19	0	0	3	37	0	0	0	5	1	1	73	0	1	0	13	2	47	2	252	11
	当期純利益（▲損失）	80	▲ 23	39	30	6	▲ 41	▲ 27	94	▲ 54	6	1	8	▲ 96	75	462	115	▲ 60	4	2	2	91	47	759	35
関連する法人（アカデミーなどサッカー及びその他関連する事業を運営する法人）の営業収益		–	46	237	–	46	–	96	–	–	110	110	63	54	–	–	–	244	100	53	–	84	–		

2．貸借対照表

（百万円）

		仙台	秋田	山形	いわき	水戸	栃木	群馬	大宮	千葉	東京Ｖ	町田	甲府	金沢	清水	磐田	藤枝	岡山	山口	徳島	長崎	熊本	大分
		2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期
資産	流動資産	972	230	731	387	697	279	203	1,063	1,204	999	904	816	229	491	797	264	865	659	2,013	2,218	737	472
	固定資産等	431	73	221	154	18	70	973	900	690	132	1,808	182	96	475	1,172	72	410	65	861	129	41	119
	資産の部　合計	1,403	303	952	541	715	349	1,176	1,963	1,894	1,020	2,712	797	325	966	1,979	336	1,275	724	2,874	2,347	778	591
負債	流動負債	499	117	499	439	288	168	1,138	896	990	1,117	541	313	111	437	1,969	199	817	323	1,247	2,320	473	424
	固定負債	626	122	297	33	189	11	0	763	667	386	492	169	167	357	94	59	394	131	68	3	68	31
	負債の部　合計	1,125	239	796	471	444	177	1,138	1,849	1,657	1,502	1,033	482	278	794	1,149	195	1,211	454	1,315	2,323	541	455
資本	資本金	790	59	10	5	100	318	293	100	490	361	100	367	230	99	579	99	77	100	409	380	280	134
	資本剰余金等	327	52	0	0	138	118	138	240	390	262	1,936	0	0	0	0	239	219	92	0	0	0	134
	利益剰余金	▲ 829	▲ 40	179	65	▲ 65	▲ 268	▲ 378	▲ 35	▲ 496	▲ 1,090	▲ 258	▲ 52	▲ 183	72	51	▲ 186	▲ 23	78	960	▲ 326	▲ 143	▲ 132
	資本（純資産）の部　合計	278	70	189	70	171	172	51	305	397	▲ 463	1,179	315	47	162	730	141	284	270	1,369	24	337	136

※1 端数処理の影響で合計値が一致一致しないところがある。合計数値は、各クラブの百万円単位の金額を単純に合計したものである。
※2 上記数値はクラブ運営法人単体の数値であるため、アカデミー（育成・普及）事業を、クラブ運営法人と直接関係のあるＮＰＯ法人や一般社団法人に移管している場合には、アカデミー関連収入及び費用が上記数値に含まれないことがある。
※3 「物販収入」および「物販関連費」は、代理店に委託販売しているケース等もあることから、取扱い高総額でのクラブ間比較はできない。
※4 固定資産等の欄分には、繰延資産も含めて表示している。

出典：Ｊリーグ公式サイト　2023 年度クラブ決算一覧

https://aboutj.jleague.jp/corporate/assets/pdf/club_info/j_kessan-2023.pdf　（2024.12.21 アクセス）

表 4　2023 年度 J3 クラブ決算

1．損益計算書

（百万円）

		八戸	岩手	福島	ＹＳ横浜	相模原	松本	長野	富山	沼津	岐阜	ＦＣ大阪	奈良	鳥取	讃岐	愛媛	今治	北九州	宮崎	鹿児島	琉球	Ｊ３総合計	Ｊ３平均
		2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期		
損益計算書	売上高	484	536	403	200	486	1,456	741	786	511	904	559	429	469	424	860	1,292	933	218	886	612	13,108	655
	スポンサー収入	296	293	261	121	240	780	338	490	309	477	404	215	193	194	389	744	467	110	437	169	6,947	347
	入場料収入	13	21	16	26	46	276	69	54	32	90	16	38	38	36	58	78	52	22	79	34	1,128	56
	Ｊリーグ配分金	21	91	30	19	62	70	20	23	19	24	19	21	23	21	66	26	52	20	23	62	720	36
	アカデミー関連収入	0	98	20	0	73	24	43	62	43	78	18	68	50	43	93	41	107	0	0	93	921	46
	女子チーム関連収入	0	0	0	0	0	0	173	0	0	0	1	0	0	0	88	0	0	0	0	0	263	13
	物販収入	32	30	33	9	40	153	15	66	54	96	12	28	58	36	66	61	60	14	150	49	1,061	53
	その他収入	102	75	50	36	26	153	63	61	54	139	59	69	106	96	90	343	134	43	197	85	2,070	104
	売上原価	313	481	361	221	690	1,241	566	592	353	814	335	292	278	305	673	935	817	282	617	693	10,837	542
	トップチーム人件費	126	255	167	113	265	518	190	244	170	358	158	163	140	143	272	420	295	144	287	314	4,709	235
	試合関連経費（ホームゲーム開催費）	81	91	40	52	111	244	49	62	39	114	120	15	23	44	37	149	76	26	95	77	1,468	73
	トップチーム運営経費	67	91	70	35	161	182	106	128	79	95	41	32	61	88	116	178	106	60	173	109	1,658	83
	アカデミー関連経費	0	54	36	0	78	88	71	116	22	88	11	87	36	67	101	97	173	24	0	126	1,275	64
	女子チーム関連経費	0	0	0	0	0	0	140	0	0	0	2	0	0	0	70	30	0	0	0	4	246	12
	物販関連費	32	30	16	10	55	91	0	42	46	76	4	20	7	23	47	29	52	18	82	31	708	35
	その他売上原価	57	0	32	0	0	117	0	0	0	93	1	5	0	0	0	38	125	0	0	3	471	24
	販売費および一般管理費	202	153	148	84	344	430	282	231	164	159	223	127	257	150	208	559	217	100	305	241	4,584	229
	営業利益（▲損失）	▲ 21	▲ 98	▲ 96	▲ 96	▲ 518	▲ 215	▲ 97	▲ 37	▲ 6	▲ 69	1	10	▲ 64	▲ 81	▲ 21	▲ 202	▲ 101	▲ 164	▲ 36	▲ 302	▲ 2,313	▲ 116
	営業外収益	25	17	6	2	19	25	0	1	9	3	1	6	5	5	24	23	1	1	2	12	187	9
	営業外費用	3	0	2	1	5	0	1	0	2	1	1	0	6	3	1	2	1	0	4	5	39	2
	経常利益（▲損失）	1	▲ 81	▲ 92	▲ 95	▲ 504	▲ 190	▲ 96	▲ 36	1	▲ 67	1	16	▲ 65	▲ 89	2	▲ 181	▲ 101	▲ 163	▲ 38	▲ 308	▲ 2,165	▲ 108
	特別利益	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	141	0	0	0	0	0	0	142	7
	特別損失	0	0	0	0	73	14	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3	16	0	0	0	108	5
	税引前当期利益（▲損失）	1	▲ 80	▲ 92	▲ 95	▲ 577	▲ 204	▲ 96	▲ 36	1	▲ 67	1	16	▲ 67	52	2	▲ 184	▲ 117	▲ 163	▲ 38	▲ 308	▲ 2,131	▲ 107
	法人税および住民税等	0	2	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	10	1
	当期純利益（▲損失）	1	▲ 82	▲ 95	▲ 96	▲ 577	▲ 205	▲ 96	▲ 36	1	▲ 67	1	16	▲ 68	52	1	▲ 185	▲ 117	▲ 163	▲ 38	▲ 308	▲ 2,141	▲ 107
関連する法人（アカデミーなどサッカー及びその他関連する事業を運営する法人）の営業収益		48	–	14	117	–	143	–	–	196	–	–	54	–	11	–	188	–	–	136	–		

2．貸借対照表

（百万円）

		八戸	岩手	福島	ＹＳ横浜	相模原	松本	長野	富山	沼津	岐阜	ＦＣ大阪	奈良	鳥取	讃岐	愛媛	今治	北九州	宮崎	鹿児島	琉球
		2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2023年12月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期	2024年1月期
資産	流動資産	211	199	147	23	647	670	229	134	200	626	171	136	23	141	226	797	224	90	211	431
	固定資産等	164	40	16	6	10	294	16	4	89	3	23	8	235	200	135	1,399	128	12	56	10
	資産の部　合計	375	239	163	29	657	972	245	138	289	429	194	143	258	341	360	2,196	352	102	267	441
負債	流動負債	176	149	50	35	59	227	91	131	159	235	65	68	177	138	89	297	77	17	89	54
	固定負債	181	0	106	78	1,018	199	64	5	106	97	48	57	365	97	21	329	200	0	139	93
	負債の部　合計	356	149	156	113	1,077	426	155	136	264	332	113	125	542	235	110	626	277	17	228	147
資本	資本金	59	405	224	52	34	212	127	138	98	50	30	58	231	100	409	50	31	100	78	98
	資本剰余金等	0	122	0	28	0	0	102	70	18	668	28	0	167	100	▲ 1	1,698	124	143	77	221
	利益剰余金	▲ 40	▲ 440	▲ 217	▲ 163	▲ 544	334	▲ 159	▲ 207	▲ 87	▲ 641	25	▲ 50	▲ 702	▲ 94	▲ 158	▲ 118	▲ 80	▲ 158	▲ 116	▲ 25
	資本（純資産）の部　合計	19	87	7	▲ 83	▲ 520	546	70	2	25	97	81	18	▲ 304	106	250	1,670	75	85	39	294

※1 端数処理の影響で合計値が一致一致しないところがある。合計数値は、各クラブの百万円単位の金額を単純に合計したものである。
※2 上記数値はクラブ運営法人単体の数値であるため、アカデミー（育成・普及）事業を、クラブ運営法人と直接関係のあるＮＰＯ法人や一般社団法人に移管している場合には、アカデミー関連収入及び費用が上記数値に含まれないことがある。
※3 「物販収入」および「物販関連費」は、代理店に委託販売しているケース等もあることから、取扱い高総額でのクラブ間比較はできない。
※4 固定資産等の欄分には、繰延資産も含めて表示している。
※5 相模原は、5月の生行開示から「試合関連経費（ホームゲーム開催費）」と「トップチーム運営経費」に修正がある。

出典：Ｊリーグ公式サイト　2023 年度クラブ決算一覧

https://aboutj.jleague.jp/corporate/assets/pdf/club_info/j_kessan-2023.pdf　（2024.12.21 アクセス）

J1 から J3 のクラブで、女子チーム関連経費の計上があったクラブは全 14 チームで、WE リーグに所属するクラブを持ったチームは計 7 チームであった。（表 1,2,3 参照）そのなかでも経費が収入を上回るクラブは、日テレ・東京ベレーザ、大宮アルディージャ VENTUS、セレッソ大阪ヤンマーレディース、AC 長野パルセイロ・レディースの四チームにとどまった。ここで気になったのが WE リーグの企業スポーツ色である。WE リーグは WE ACTION　DAY と称し、地域貢献活動を多く行っているにも関わらず、日テレ・東京ベレーザや、三菱重工浦和レッズレディース等、ほとんどのチームに企業名が入ることにギャップを抱いてしまう。もちろん、WE リーグは 2021 年に発足したばかりの新しいプロリーグであり、収益基盤がまだ十分に確立されていないため、運営資金を確保するためには、企業スポンサーに頼らざるを得ない現状があり、企業名を冠することでスポンサーの広告効果を高め、資金提供を引き出すことは重要である。しかし今後、徐々に企業依存から脱却し、地域との結びつきを強化するよう移行していくフェーズに入っていくだろうと考える。長期的に地域住民のサポートを得ながら、地域社会に根ざした持続可能な運営モデルを構築することが求められ、この過渡期のギャップを埋めることが、女子サッカーのさらなる成長にとって重要である。

2-2 社会的影響をもたらすメディア戦略

女子サッカーは、男子サッカーに比べて圧倒的にメディア露出が少なく、その影響で認知度や観客動員数、スポンサー収入にも大きな差が生じている。2024 年、一年間で掲載された新聞で、女子サッカーとワードが入った記事の件数は 4900 件、WE リーグは 3572 件であったのに対し、J リーグは 21943 件あった。[6]

たとえば、FIFA ワールドカップでは、男子大会が全世界で多くの視聴者を集める一方、女子大会の放送は限られたプラットフォームや時間帯で行われることが多く、注目度が低い状況にある。国内でも、J リーグと WE リーグを比較すると、試合の中継回数や報道の頻度に大きな違いが見られる。

また、WE リーグ開幕当初の JFA（日本サッカー協会）の広告戦略は、女子サッカーを新しいステージへ引き上げる野心的な試みだったといえるものの、そのアプローチには成功した点と課題が混在していたとも考える。

[6] 日経テレコン２１　新聞トレンド検索 https://t21.nikkei.co.jp/g3/CMN0F12.do（2025.1.27 アクセス）

写真 3　コンセプトムービー「女の子の夢から、限界をなくせ」篇
出典：WE リーグ YouTube 公式チャンネル　WE リーグ コンセプトムービー「女の子の夢から、限界をなくせ」篇
https://www.youtube.com/watch?v=FahzTUrzTLc

WE リーグは開幕当初「世界最高峰の女子プロリーグ」を目指すという明確なビジョンを掲げた[7]。「WE」には「Women's Empowerment（女性の活躍推進）」というメッセージが込められており、単なるスポーツリーグに留まらず、ジェンダー平等や社会的意識向上を目指す理念を強調したメディア戦略を広げた[8]。WE リーグ開幕に際して WE リーグ YouTube 公式チャンネルにて公開されたコンセプトムービー「女の子の夢から、限界をなくせ」篇[9]や、優勝トロフィー「ガラスの天井」を壊す　WE LEAGUE trophy breaking "Glass ceiling"[10]でも、女子サッカーの競技としての魅力が伝わりづらい。これにより、スポーツファンだけでなく、社会課題に関心のある層にも訴求力を持たせる足がかりとなったことは成功点だったと言える。

一方で、理念重視で抽象的なメッセージが目立ったともとらえられる。「ジェンダー平等」

---

[7] JFA 公式ホームページ　日本初の女子プロサッカーリーグ『WE リーグ』が 2021 年秋に開幕決定　2020.06.04
https://www.jfa.jp/women/we_league/news/00024986/　（2024.12.23 アクセス）
[8] WE リーグ公式サイト　WELEAGUE PROFILE BOOK
https://weleague.jp/pdf/about/outline/22-23WELEAGUE%20PROFILE_A3.pdf
（2024.12.23 アクセス）
[9] WE リーグ YouTube 公式チャンネル　WE リーグ コンセプトムービー「女の子の夢から、限界をなくせ」篇
https://www.youtube.com/watch?v=FahzTUrzTLc　（2024.12.23 アクセス）
[10] WE リーグ YouTube 公式チャンネル　Yogibo WE リーグ 優勝トロフィー「ガラスの天井」を壊す　WE LEAGUE trophy breaking "Glass ceiling"
https://www.youtube.com/watch?v=CLlsDanQgKc　（2024.12.23 アクセス）

や「女性の活躍推進」という大きなテーマは、社会的意義を伝える一方で、具体的にどのような層に向けて訴求しているのかが不明瞭だった。サッカーファンや地域住民といった直接的な観客層へのアプローチが薄く、スタジアム動員にはつながりにくかった可能性は否めない。広告が理念や社会的意義に偏りすぎた結果、選手や試合の具体的な魅力を十分に伝えきれなかった。スポーツファンにとっては、「どの選手が注目なのか」「試合の見どころは何か」といった情報が重要であり、その部分を掘り下げた広告が少なかったといえる。

WE リーグ開幕から 3 年が経ち、試合そのものの魅力を PR する広告も増えてきている。今後も、選手や試合の見どころをメインにした広告を増やし、サッカーそのものの面白さを伝えることが重要だと考える。また、ターゲットを明確にすることも重要である。地元住民や若年層、家族連れなど具体的な観客層を絞り込み、それぞれに合ったメッセージを発信することで、メディア戦略が観戦の一助となってほしい。

2-3 役職やコーチの男女比率

本年も世界経済フォーラム（World Economic Forum：WEF）が公表した、「The Global Gender Gap Report 2024」において、各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index：GGI）が発表された[11]。この指数は、「経済」「教育」「健康」「政治」の 4 つの分野のデータから作成され、 0 が完全不平等、 1 が完全平等を示している。2024 年の日本の総合スコアは 0.663、順位は 146 か国中 118 位で、過去最低の順位だった。先進国の中で最低レベル、アジア諸国の中で韓国や中国、ASEAN 諸国より低い結果となっている。日本社会全体が、他の国と比較しても大きなジェンダー・ギャップを抱えていることは明らかだが、さらにスポーツという領域においてはいまだ世界レベルで深刻な課題となっている。

UN WOMEN によると、前回の女子サッカーワールドカップの支出総額は 1500 万ドルだったが、男子サッカーワールドカップは 5 兆 7600 万ドルであった[12]。また、スポーツ関連組織やスポーツ衣料会社、市場関係者の指導的地位において、女性の代表者は少ない状況である。そんななか、WE リーグの役員は今、役員の半分を女性が占めている。しかし現場レベルになると、男性役員が多いのが現状だ。これに対し、5 つの問題があると考える。

①多様性と包括性の欠如: 女子サッカークラブの役員に女性が少ないと、多様な視点や経験が反映されにくくなり、クラブの運営や決定において包括性が欠ける可能性がある。女性役

---

[11] 男女共同参画局　男女共同参画に関する国際的な指数
https://www.gender.go.jp/international/int_syogaikoku/int_shihyo/index.html
(2024.7.16 アクセス)

[12] UNWOMEN　スポーツとジェンダー平等
https://www.gender.go.jp/international/int_syogaikoku/int_shihyo/index.html

員が増えることで、女性選手のニーズや問題がより理解され、適切に対応される可能性が高まる。
②ロールモデルの不足: 女性がリーダーシップポジションに少ないと、若い女性選手にとってのロールモデルが不足する。これは、次世代の女性がサッカー界で指導的立場を目指すことに対する意欲や信念を損なう可能性がある。
③性別による不平等感の増幅: 男性が役員の大多数を占めると、性別による不平等感が増幅される恐れがある。女性選手やスタッフが、自分たちの意見や要望が適切に評価されていないと感じる可能性がある。
④コミュニケーションの課題: 女性の経験や視点を持つ役員が少ないと、女性選手とのコミュニケーションが不足し、彼女たちが直面する特有の課題や問題が十分に理解されない可能性がある。
⑤ガバナンスと意思決定の質: 多様な背景を持つ役員がいることは、ガバナンスと意思決定の質を向上させるとされている。性別の多様性が欠けると、偏った視点での意思決定が行われるリスクが増加する。
これらの問題に対し、WE リーグは女性リーダーシッププログラムを行うなど、現状を問題視している。外だけではなく現場レベルの内から体制を変えていくことで、ジェンダー問題に対し社会的に大きな影響力を持つリーグとなってほしい。

第三章 ジェンダー平等のための取り組みと課題

3-1 国際的および国内の政策・支援の現状

2018 年、女子サッカーに関する初のグローバル戦略であり、FIFA が大陸連盟や加盟協会（MA）・クラブ・選手・メディア・ファン・その他の関係者とどのように協力して、女子サッカーの可能性を最大限に引き出すかについての道筋を示す、女子サッカー戦略が設立された[13]。ここでは、女子サッカー競技者人口を世界で 6000 万人に増やす。 女子サッカーのリーグやクラブの運営をプロフェッショナル化する。女子サッカーの大会を通じて収益性

[13] ANZA 進化するアフリカ女子サッカー：FIFA の挑戦と展望
https://anza-africa.com/%E3%82%A2%E3%83%95%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%A5%B3%E5%AD%90%E3%82%B5%E3%83%83%E3%82%AB%E3%83%BC%EF%BC%9Afifa%E3%81%AE%E6%8C%91%E6%88%A6%E3%81%A8%E5%B1%95%E6%9C%9B#:~:text=2018%E5%B9%B4%E3%81%AB%E8%A8%AD%E7%AB%8B,%E3%82%92%E7%A4%BA%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82

を向上させ、男女間の資金配分の格差を減らす[14]。という三つの目標を軸に掲げられた。
これにより、FIFA 女子ワールドカップは、2019 年大会から出場国を 24 カ国から 32 カ国に拡大するなど、女子サッカーの競技レベルと注目度を高める努力を行っている。また、優勝賞金も段階的に増やし、男子大会との格差を縮小する取り組みを進めている。

表 5　女子サッカーW 杯の賞金総額　単位：ドル

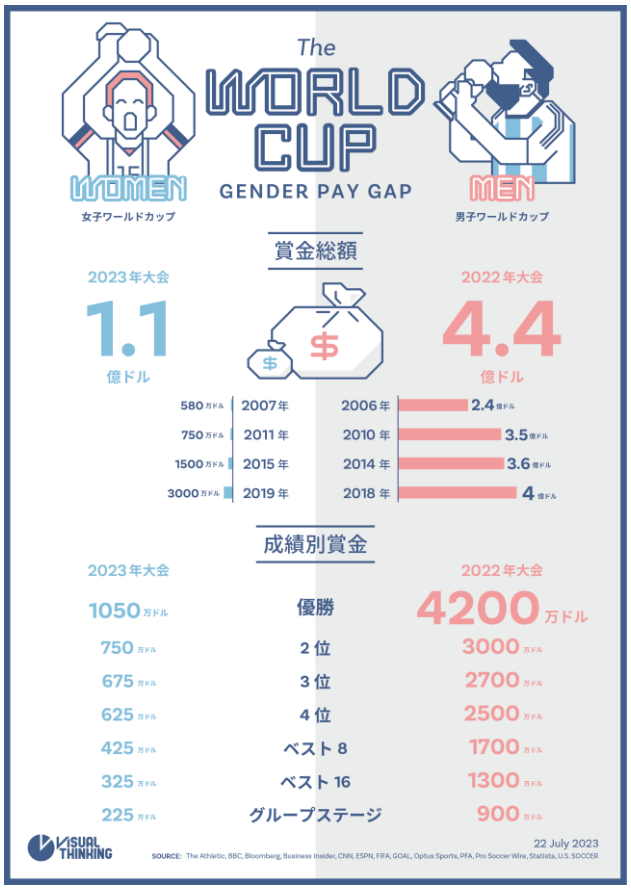
開催年	賞金総額
2007 年	580 万
2011 年	750 万
2015 年	1500 万
2019 年	3000 万
2023 年	1 億 1000 万

出典：VISUAL　THINKING　サッカーW 杯賞金の男女格差
https://visualthinking.jp/wc-gender-pay-gap/

ただ、2023 年大会では、総額 1 億 5000 万ドルと過去最高額の賞金が設定されたものの、依然として男子の 4 億 4000 万ドルと大きな差がある[15]。

[14] FIFA　WOMEN'S FOOTBALL STRATEGY
FIFA-Women-s-Football-Strategy-2024-2027_EN.pdf　（2024.12.23 アクセス）
[15] VISUAL　THINKING　サッカーW 杯賞金の男女格差
https://visualthinking.jp/wc-gender-pay-gap/　（2024.12.23 アクセス）

表 6　サッカーW 杯賞金の男女格差



出典：VISUAL　THINKING　サッカーW 杯賞金の男女格差

https://visualthinking.jp/wc-gender-pay-gap/

これを受けて日本女子サッカーも、なでしこ Vision という目標を掲げている[16]。なでしこ Vision では、2030 年までに登録女子プレーヤーを 200,000 人にすると明記されている。実際に、2024 年 12 月 29 日から行われる第 33 回全日本高等学校女子サッカー選手権大会では、従来の 9 地域代表制から変更し、初めて 47 都道府県代表制で開催する[17]。こうすることで、全国に高校女子サッカーを志す選手が散らばり、競技レベル向上、地域への女子サッカー普及の一助となると思う。また、WE リーグでは待遇面の格差という無視できない現状を踏まえ、最低年俸が設定されている。経済的な理由でプロを諦めない選手を一人でも少なくし、選手の最低限の生活を守ることを重要としている。

---

[16] JFA 公式ホームページ　なでしこ Vision とは
https://www.jfa.jp/women/nadeshiko_vision　（2024.12.23 アクセス）

[17] JFA 公式ホームページ　全 52 の出場校が決定　第 33 回全日本高等学校女子サッカー選手権大会　2024.11.19
https://www.jfa.jp/women/news/00034528/　（2024.12.23 アクセス）

3-2 女子サッカーを通じたジェンダー平等意識の促進

(1) LGBTQ

女子サッカーのアイデンティティ、価値を育成するもの、その 1 つが WE リーグの理念を語る岡島喜久子チェアマンの言葉にある。

『女子サッカー界というのは LGBTQ の選手たちが普通にカムアウト、話ができる自由な雰囲気があります。ここから発信していくことで、自分の思ったとおりに生きられる社会を目指したい。企業、教育機関や他のスポーツ団体も巻き込んで大きな渦にしていきたいと思います。』LGBTQ とジェンダー平等は同じ問題ではないが、人権と平等の推進、差別と偏見の解消という目標は合致する[18]。

現在、WE リーグは LGBTQ 問題を通した多様性な発信が多く見られる。そして今後他の企業や団体を巻き込むことで WE リーグの理念である『女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する。』ことに近づいていく。それが WE リーグの価値向上、そして選手たちのアスリートアイデンティティ、女子サッカーのアイデンティティ形成に繋がる 1 つの活動になると考える。

(2) セクハラ問題

なでしこケアという女子サッカー選手が起こした団体は、普及活動やキャリアビルディングだけでなく、セクハラに対してもアクションを起こしている[19]。

創設第一回目のワークショップでは、女子サッカー選手 16 名が集まり、「スポーツ界におけるセクハラ撲滅」をテーマに、原因や解消するために選手ができることを議論した。

ここで出たのは、「監督にノーと言えない環境がある」「選手と指導者が過度にコミュニケーションを取り、関係性が保てない」「相談できる場所がない」という意見である。

また、「男性指導者はレベルが高い指導をしてくれ、女子サッカーのレベルアップに欠かせない存在」とした上で、「指導者の意識の問題もあるが、選手自身もしっかり自覚し、セクハラを防止していくことが必要」と選手自らが問題に取り組む意欲を明かした。これにより、窓口として、なでケアが積極的に相談を受けることや、指導者研修にセクハラ防止の内容を加えることなどが提案された[20]。実際にプロ女子サッカー選手だけでなく、女子サッカーを

---

[18] NHK 熱戦が続くサッカー女子 W 杯▽密着!選手が発信する“多様な性” https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4809/（2024.7.16 アクセス）

[19] 一般社団法人なでしこケア　WHAT　WE DO　https://nadecare.jp/　（2024.7.16 アクセス）

[20] 東京新聞　2019.8.24 なでしこケア立ち上がれ女子サッカーセクハラ撲滅へ https://www.tokyo-np.co.jp/article/19698(2024.7.16 アクセス）

する、育成年代の選手など、全ての人が悩みを現役・引退を含む女子サッカー選手に相談出来る窓口を作っている。

第四章 フェミニズム視点での考察と女子サッカーの多様性

本研究では、女子サッカーを題材に、ジェンダー平等の観点からスポーツ界における課題と取り組みを分析した。女子サッカーは、男子サッカーとは異なる特徴や魅力を持つ一方で、歴史的・構造的なジェンダー不平等に直面している。特に、給与や待遇、メディア露出、競技の認知度といった側面での格差が顕著である。これらの格差は、単に競技者としての能力や観客動員数だけで説明できるものではなく、社会的なジェンダー構造や固定観念に深く根ざしている。例えば、「サッカーは男性的なスポーツである」という偏見が、女子サッカーの価値を低く見積もる要因となり、資金や支援の不足を招いている。

こうした課題を克服するためには、スポーツ界全体がジェンダー平等の理念を共有し、構造的な改革を進める必要がある。具体的には、女子サッカーへの投資拡大、待遇の改善、メディアでの露出拡大を通じて、競技としての価値を再評価することが求められる。日本初の女子プロサッカーリーグである WE リーグは、ジェンダー平等を理念に掲げ、女子サッカーの発展において重要な役割を果たしている。特に、最低年俸の設定や地域密着型の運営、ホームタウン活動を通じて、選手の生活基盤の安定と地域社会とのつながりを強化している点は大きな前進である。しかし、開幕当初から課題とされているスポンサー収入や観客動員数の確保、メディア露出の拡大といった点は、依然として解決すべき課題である。WE リーグが持続可能なリーグとして発展していくためには、地域社会との連携をさらに深め、地域住民をファンとして巻き込むことが必要である。また、リーグの理念である「女性の活躍推進」を具体的な行動に結びつけることで、女子サッカーが競技としてだけでなく、社会的な変革の象徴となる可能性が高まる。

そして、スポーツは、社会の縮図であると同時に、変革を促す力を持つ。女子サッカーは、ジェンダー平等を推進する象徴的な存在として、スポーツを超えた影響力を持つ可能性がある。たとえば、女子サッカー選手が活躍する姿を通じて、若い世代や少女たちに夢と希望を与え、性別に関係なく自己実現を目指す重要性を伝えることができる。さらに、女子サッカーの発展は、スポーツ界全体の多様性と包摂性を高めるきっかけとなる。特に、男子スポーツとの相互作用を通じて、競技そのものの価値を高めるとともに、社会全体におけるジェンダー平等の実現に貢献するだろう。

今後、女子サッカーが持続的に発展するためには、競技としての魅力をさらに高めると同時に、社会的な課題に向き合う必要がある。特に、ジェンダー平等を実現するための政策や支援体制の強化が求められる。具体的な施策は 3 点あると考える。

一つ目は資金源の多様化である。企業スポンサーだけでなく、地域社会や自治体との連携を

深め、多様な収益源を確保することが重要である。二つ目が教育と啓発活動である。学校教育や地域イベントを通じて、女子サッカーの魅力を伝え、競技人口と観客層の拡大を図りたい。三つ目はグローバルな連携である。国際的な大会や交流を通じて、競技レベルの向上と国際的な認知度の向上を目指す。

女子サッカーは、社会的課題への取り組みを通じて、ジェンダー平等の実現に寄与する可能性を秘めている。そしてまた、スポーツとしての魅力にもあふれている。

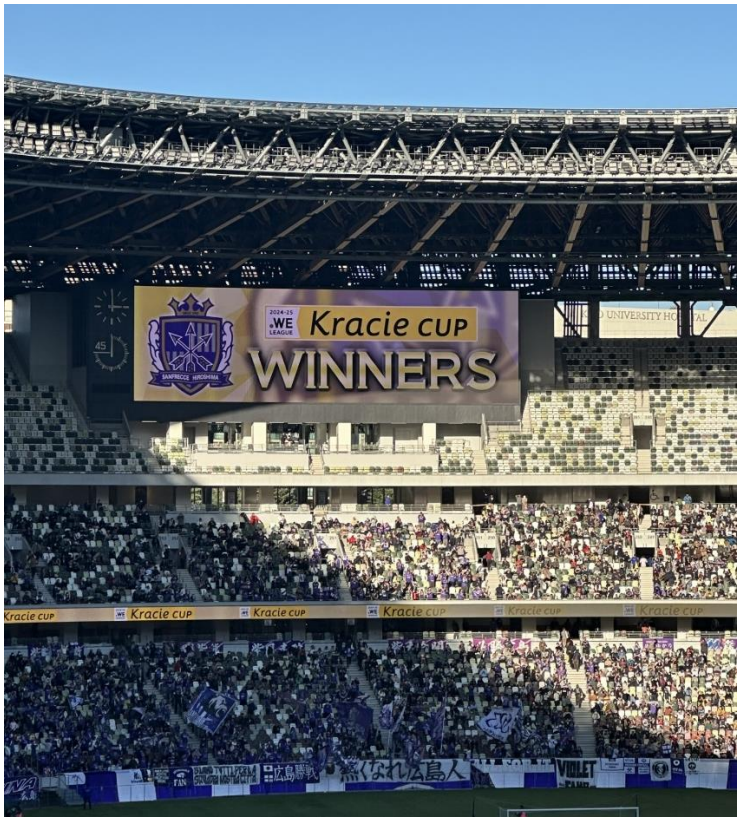


写真 4　2024 年 12 月 29 日開催クラシエカップ決勝にて（筆者撮影）

女子サッカーは男子サッカーに比べてフィジカルの差が小さい分、技術や戦術がより重視される。細かいパスワークやポジショニングの工夫が試合を左右することが多く、チーム全体の連携が見どころである。また、男子サッカーに比べて試合の展開がスムーズで、ラフプレーやフィジカルコンタクトが比較的少ないため、ボールがよく動く、流れるような展開になりやすい。これにより、攻守の切り替えがスピーディーで、観ていて爽快感がある。

近年のなでしこジャパンの核となる長谷川唯選手からも日本女子サッカーの技術力の向上が見て取れる。長谷川の最大の特徴は、優れたボールコントロールと広い視野を活かしたプレーメイクであり、狭いスペースでもボールを失わず、周囲の選手を活かすパスを出せるため、攻撃のリズムを作る 2 ボランチの一角を担っている。

写真 5　2023 女子サッカーワールドカップ初陣のスターティングメンバー

出典：日テレ NEWS　【なでしこジャパン】W 杯初陣スタメン発表　世界ランキング 77 位ザンビアと激突 https://news.ntv.co.jp/category/sports/cc92e428230b402db14e85b0ea26f80f

彼女はトップ下やインサイドハーフ、さらにはサイドにも流れる柔軟な動きで、相手守備を崩す起点となる。これによりなでしこジャパンの攻撃は流動的になり、複数の選択肢を持つようになった。また攻撃だけでなく、前線からのプレスやボール奪取にも積極的であり、守備意識の高さがなでしこジャパンの攻守の切り替えをスムーズにする要因となっている。まさに 2 ボランチの役割を一人で二役こなせる日本が誇るプレーヤーだ。かつての日本女子代表は、細かいパスをつなぐポゼッションサッカーが特徴だった。しかし、近年はポゼッションにこだわりすぎず、速攻やダイレクトプレーを取り入れた攻撃的なスタイルへと変化している。長谷川のパスワークとドリブルが、このスタイルの軸になっていると言える。また、以前のなでしこジャパンは、ショートパスで細かく崩すことが多かったが、現在は素早い縦パスやカウンターを狙う動きが増えている。長谷川はこの変化の中心におり、中盤から前線への供給役として重要な役割を果たしている。守備面でも、以前のなでしこジャパンは組織的なブロックを作る守り方が多かったが、現在は前線からのハイプレスを強め、素早くボールを奪い返すスタイルへと移行している。長谷川はこのプレスの先陣を切る役割を担い、チーム全体の守備のスイッチを入れている。しかし、なでしこジャパンは戦術面では進化しているものの、欧米の強豪国に比べてフィジカル面での課題は依然として残っている。特に、セットプレー時の守備や空中戦での対応が課題である。また、長谷川のパスセンスを活かすためにも、前線の選手がより決定力を向上させる必要がある。WE リーグの試合を観戦した中でも決定力不足は否めず、フィジカルが優れている選手でもチャンス時に中

に入ってこられていない場面が目立った。ワールドクラスのフィニッシャーの育成がなでしこジャパンが再び世界の頂点に立たせるには急務であろう。

女子サッカーは国やチームによってプレースタイルが多様で、技術に優れたチーム、戦術的に優れたチーム、フィジカルを活かすチームなど、さまざまな特徴を持つチームが存在する。多様性が、試合ごとの面白さを生み出すという魅力は、かつてスペインが無双していた2008年～2012年の時代の男子サッカーの面白さを彷彿とさせる。スペインはポゼッションを極めたティキ・タカで、イニエスタやシャビを中心にしたパスワークでボールを支配しながら相手を崩すスタイル、ドイツは機動力と組織的な攻撃を武器にしつつ、カウンターの鋭さも持つなど各国のサッカーがより顕著であった。今の女子サッカーには同じように、各国の特徴が多様化しており、その面白さは右肩上がりである。女子サッカーは、各国が「どう対抗するか」という戦術的な駆け引きが明確で、戦術的な色がはっきりしていることが面白さだと筆者は感じている。

また、女子サッカーが持つ社会的な意義をより広めるためには、競技としての価値を高めるとともに、観戦文化の醸成が不可欠である。現在、日本においては、男子サッカーと比較すると女子サッカーの試合をスタジアムで観戦する文化が十分に根付いているとは言い難い。今後、さらなる発展のためには、国内リーグの競争力向上と観客の定着が重要となる。そのためには、まずリーグのブランディング強化が必要である。WEリーグは「世界一の女子プロサッカーリーグ」を目指すことを掲げているが、その理念を実現するためには、単なる競技の枠を超えて、エンターテインメントとしての価値を高める施策が求められる。例えば、試合の演出やSNS戦略の強化、ファンサービスの充実などを通じて、より多くの人々をスタジアムに呼び込む仕組みを整えることが必要である。

また、メディアの積極的な活用も不可欠である。現状、男子サッカーと比べて女子サッカーのメディア露出は依然として少ない。WEリーグの試合は一部のテレビ放送や配信サービスで視聴可能だが、その認知度はまだ十分とは言えない。海外では、女子サッカーの試合をYouTubeなどの無料プラットフォームで配信することで視聴者層を広げる試みが成功している例もあり、日本でもより積極的にデジタルメディアを活用することが求められる。さらに、選手個々のストーリーを伝えるコンテンツを充実させることで、ファンの共感を呼び、競技の魅力を高めることができる。

そして、育成環境の充実も極めて重要である。日本の女子サッカーは技術面では世界トップクラスにあるものの、フィジカル面や決定力の課題が指摘されている。これを克服するためには、ジュニア世代からの育成システムを整備し、フィジカルの強化や個々の選手の能力を最大限に引き出す環境を整える必要がある。特に、欧米の強豪国では、女子サッカーのアカデミーや大学リーグが充実しており、競技者のキャリア形成の選択肢が多い。一方、日本では女子サッカー選手がプロとしてキャリアを継続することが難しく、引退後のセカンドキャリアの問題も深刻である。この点についても、欧米の事例を参考にしながら、リーグやクラブが積極的に支援策を講じるべきであろう。

最後に、社会全体の意識改革が不可欠である。女子サッカーの発展は、単に競技の普及だけでなく、ジェンダー平等の促進という側面を持つ。スポーツを通じて社会の偏見や固定観念を変え、多様な生き方を認める文化を醸成することが、最終的には女子サッカーの持続的な発展につながるだろう。そのためには、スポーツ界だけでなく、企業、教育機関、メディア、そして社会全体が連携し、女子サッカーの価値を高める取り組みを進めることが重要である。

本研究を通じて、女子サッカーが単なるスポーツとしてだけでなく、社会的な変革を促す力を持つことを明らかにした。今後は、競技の発展と社会的意義の両面を意識しながら、女子サッカーのさらなる成長を支える取り組みを推進していくことが求められる。スポーツの持つ可能性を最大限に活かし、ジェンダー平等の実現に向けた一歩を踏み出すことこそが、女子サッカーの未来をより明るくする鍵となるだろう。

〈参考文献〉

申恩 真（2022)「女子サッカー選手のエスノグラフィー 不安定な競技実践形態を生きる」春風社

スザンヌラック（2022)「女子サッカー140 年史―闘いはピッチとその外にもあり」 白水社

一般社団法人なでしこケア 「WHAT WE DO」 https://nadecare.jp/ （2024.7.16 アクセス）

東京新聞 2019.8.24「なでしこケア立ち上がれ女子サッカーセクハラ撲滅へ」https://www.tokyo-np.co.jp/article/19698(2024.7.16 アクセス）

内閣府男女共同参画局 「男女共同参画に関する国際的な指数」https://www.gender.go.jp/international/int_syogaikoku/int_shihyo/index.html (2024.7.16 アクセス）

日経テレコン２１ 「新聞トレンド検索」https://t21.nikkei.co.jp/g3/CMN0F12.do （2025.1.27 アクセス）

ANZA 「進化するアフリカ女子サッカー：FIFA の挑戦と展望」https://anza-africa.com/%E3%82%A2%E3%83%95%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%A5%B3%E5%AD%90%E3%82%B5%E3%83%83%E3%82%AB%E3%83%BC%EF%BC%9Afifa%E3%81%AE%E6%8C%91%E6%88%A6%E3%81%A8%E5%B1%95%E6%9C%9B#:~:text=2018%E5%B9%B4%E3%81%AB%E8%A8%AD%E7%AB%8B,%E3%82%92%E7%A4%BA%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82

FIFA 「WOMEN’S FOOTBALL STRATEGY」

FIFA-Women-s-Football-Strategy-2024-2027_EN.pdf （2024.12.23 アクセス）
ITV News 「Why women's football was banned for 50 years」
https://www.itv.com/news/2022-08-01/how-womens-football-was-banned-for-50-years-in-england（2024.12.3 アクセス）
J リーグ公式サイト 「2023 年度クラブ決算一覧」
https://aboutj.jleague.jp/corporate/assets/pdf/club_info/j_kessan-2023.pdf （2024.12.21 アクセス）
JFA 公式ホームページ 「日本初の女子プロサッカーリーグ『WE リーグ』が 2021 年秋に開幕決定」 2020.06.04
https://www.jfa.jp/women/we_league/news/00024986/ （2024.12.23 アクセス）
JFA 公式ホームページ 「なでしこ Vision とは」
https://www.jfa.jp/women/nadeshiko_vision （2024.12.23 アクセス）
JFA 公式ホームページ 「全 52 の出場校が決定 第 33 回全日本高等学校女子サッカー選手権大会」 2024.11.19
https://www.jfa.jp/women/news/00034528/ （2024.12.23 アクセス）
KEGENPRESS 「女子サッカーの歴史となでしこ ― イギリスから世界に普及（1／2）」
https://kegenpress.com/women-football-history1/ （2024.12.3 アクセス）
NHK 「熱戦が続くサッカー女子 W 杯▽密着!選手が発信する“多様な性”」
https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4809/（2024.7.16 アクセス）
REAL SPORTS 「なぜ女子サッカー長者番付はアメリカ代表の独壇場なのか？ 米スポーツビジネスのメカニズムに見る 2 つの理由」
https://www.excite.co.jp/news/article/RealSports_814323436431081472/（2024.12.19 アクセス）
UNWOMEN 「スポーツとジェンダー平等」
https://www.gender.go.jp/international/int_syogaikoku/int_shihyo/index.html
VISUAL THINKING 「サッカーW 杯賞金の男女格差」
https://visualthinking.jp/wc-gender-pay-gap/ （2024.12.23 アクセス）
WE リーグ公式サイト 「WELEAGUE PROFILE BOOK」
https://weleague.jp/pdf/about/outline/22-23WELEAGUE%20PROFILE_A3.pdf
（2024.12.23 アクセス）
WE リーグ YouTube 公式チャンネル 「WE リーグ コンセプトムービー「女の子の夢から、限界をなくせ」篇」
https://www.youtube.com/watch?v=FahzTUrzTLc （2024.12.23 アクセス）
WE リーグ YouTube 公式チャンネル 「Yogibo WE リーグ 優勝トロフィー「ガラスの天井」を壊す WE LEAGUE trophy breaking "Glass ceiling"」
https://www.youtube.com/watch?v=CLlsDanQgKc （2024.12.23 アクセス）

WOJCIECH WILIŃSKI　「GENDER IDENTITY IN FEMALE FOOTBALL PLAYERS」
Gender identity in female.pdf　2024.10.31 アクセス